

五感を働かせて

塩田光喜

「今やケータイに人間が支配されている。どちらが主人だかわからない。それも情報やデータを集めて、整理するだけでしょ。沈殿していかないんだなあ。過去を思い、未来に思いをはせる。そんな時間軸での人間の物語が成り立たない。物語が消える」
(阿久 悠)

特集／途上国研究のための研究ツール—新・旧書誌情報を活用する

自然科学においては、論文の電子媒体での発表がかなり進んでいるようである。それは彼らの研究が時間との競争であるという現実に淵源する。自然科学の研究においては最初に発表した者が全ての栄光を手にする。二番手以下の発表にはほとんど価値が与えられない。Winner takes all (勝者が全てを取る)の世界なのである。それゆえ、紙媒体の場合に要する編集・校正・印刷に取られる時間は命取りになる。

人文・社会科学においては事情が異なる。「作品としての社会科学」(内田義彦)という言葉があるように、それは文学作品と一脈通じる性格がある。たとえば、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はエルンスト・

トレルチがほぼ同時に発表した論文とほぼ同様のことを語っているが、今日でも『プロ倫』は版を重ねて読み継がれているのに対し、トレルチの論文はキリスト教史研究者以外にはほとんど読者がいない。それは、『プロ倫』がプロテスタンティズムの出現を今日まで世界を支配している近代資本主義の起点として雄弁に語る「物語」として傑出しているからである。すなわち、人文

・社会科学の論文や書物には「物語」としての存在性格が深く内在している。更に言うなら、思想性の問題がある。カール・マルクスの『資本論』は、近代商品と資本についての「物語」として、圧倒的な語り力を持つ。それが、発表されると同時に古びてしまう現今の経済学の論文とは異なる所以である。だが、それだけではない。『資本論』は、今日でも、世界を見る時に、読者に深い省察と広大な展望を与えてくれる。パスペクティブ(遠近法)を備えている。そこには、単なる情報(インフォメーション)ではなく、知識(フリッジ)をすら超えた叡智(ウイズダム)がある。

電子媒体は情報との親和性は高いが、

「物語」や思想を語るには適していないと言えよう(近年ではケータイ小説なるものがあるらしいが)。

紙媒体と電子媒体はその蔵している時間の存在性格が根本的に異なるのである。電子媒体は「速さ」と不可分に結びつき、紙媒体は「熟成・持続」と不可分に結びついている。自然科学においても、ニュートンの『プリンキピア』やダーウィンの『種の起源』といった思想的作品はすでに電子化されているが、ニュートンやダーウィンを電子媒体で読もうという者は多くはいない。それに対し、「速さ」を生命とする新聞は、電子媒体と親和性が高い。それは「ニュース」という言葉からも読み取ることができ、今日では、ニュース(新聞情報)は、新聞紙ではなく検索サイトで読むという者も少なくはないだろう。検索サイトにキーワードを登録しておく、そのキーワードにひっかかるニュースのURLを世界中の主要新聞・通信社から集めてくれるというサーヴィスすらある。これは紙媒体では考えられない事態である。

私の専門領域であるオセアニア諸国の新

間も、以前は一週間遅れで届いていたものだが、今ではアジア経済研究所の開発途上国関連リンク集を開けば、ジャスト・オン・タイムで読むことができる。しかも、アジア経済研究所で取っている新聞は『パプアニューギニア・ポストクーリエ』と『フイジー・タイムズ』の二紙であるが、リンク集ではパプアニューギニアとフイジーに加えて、サモア、ソロモン諸島、トンガのメディアにもアクセスできる。そして、オセアニア全体の俯瞰を得たいならば、ハワイ大学が毎日、オセアニア全体の新聞・通信社の膨大なニュースの中からピックアップし、編集して流しているパシフィック・アイランズ・レポート(PIR)がある。これは文字通り、オセアニア全体の新聞を毎日、チェックして重要(とハワイ大学が考える)記事を流しているもので、そのためには大変な労力と選別眼を要求される貴重なサイトである。

私は、毎朝、PIRのニュースを読み、パプアニューギニアの『ザ・ナショナル』誌の電子版を読んで、一日の研究生活をスタートさせる(『パプアニューギニア・ポストクーリエ』紙は向こうの手違いでこの二年ほど送られてきていない)。

そうした意味で、紙媒体の時代から比べると、現在は恐ろしいほど、新聞情報へのアクセスが容易かつワイドになった。これはひとえに電子媒体の進化の賜物である。アジア経済研究所のリンク集はそうした

新聞情報のみにとどまらず、国際機関の報告書やオセアニアを研究する研究機関・主要大学にもアクセスできるなど、利用者の意図に応じて幅広い用途が開けている。ただし、雑誌・著書までは、リンク集ではカバーできない。電子媒体は情報の段階では、素晴らしく機能するが、一段上がった知識の段階までは、未だその力を発揮していない。これは未だ紙媒体の領域である。それにアクセスするためには、コンピュータの画面から離れて、図書館の開架に赴くしかない。もちろん、狙いの書物・雑誌が絞られていればOPACで、あらかじめ確認することは可能だが。しかし、図書館の真の楽しみは、実際に書物や雑誌を手にとって、思いがけぬ掘り出し物をする「宝探し」にある。そこまでは電子媒体に求めることは不可能である。知識を求めるには、やはり身体と五感を動員せねばならないのである。

新聞にしても、時が経てば、「ニュース」から「歴史資料」へとその性格を変える。柳田國男が日本の社会史の先駆けをなす名著『明治大正史世相篇』を編んだのは新聞のそうした歴史資料としての性格に着目してのことであった。

アジア経済研究所では、新聞はすべてマイクロ化されているが、たとえば、二〇年前の『パプアニューギニア・ポストクーリエ』の記事はすでに立派な歴史資料である。これもまた、図書館にこもってマイクロフ

イルムを回さなければアクセスできない。更に言うなら、私の専攻する文化人類学のようなフィールド・サイエンスにおいては、図書館や公文書館におけるアーカイヴアル・ワークすら二次的・補助的作業であり、まずはフィールド・ワークを行わねば全ては始まらない。

パプアニューギニアの村落にもエイズが押し寄せているが、たとえば、新聞に「奥地の村で、エイズ患者が生き埋めにされている」という記事が出ていても、フィールド・ワークでエイズの感染者に対する村人達の恐れやステイグマ感情を経験しなければ、記事の伝える現実や文化的背景に、十分に肉付けされた想像力を巡らせることは不可能である。単なる猟奇的事件として見なされるのが関の山であろう。また、「パプアニューギニアでは今年に入って、急速にモバイル・フォンが普及し、GDPを〇・一%押し上げた」という記事から、現実にはモバイル・フォンが使われている場面を想像し、そこで交わされる会話の内容を思い浮かべるには、現場に立ち会って観察する以外に手はない。

「始めに現場ありき！」
体を使って現場を踏むことによってしか、真の意味において、電子媒体であれ、紙媒体であれ、書誌情報を活用することはできないのではあるまいか。

(しおた みつき／アジア経済研究所新領域研究センター)